

発刊の辞

ここ十数年来、高度情報社会の発展にともなって図書館の変容には眼をみはるものがある。いわゆる機械化、コンピュータの導入、OA化などというものである。大学図書館もその例外ではない。本学の図書館でも、遅れ馳せながら鋭意研究であり、その成果を世に問うことができるのもそう遠いことではないと思う。

しかし、そうした機械化などでは解決できない分野が図書館には本来存在する。大学図書館、専門図書館、ことに本学のような古典の研究を一方の柱として立てる大学の図書館としては、古典籍・記録・文書等を蒐集し、調査し、閲覧に供するという仕事を欠くことはできない。本図書館でも従前からこのことに思いを致し、調査課という部署を置き、そこを中心にそれらのことを推進してきたのである。しかし、図書館として独自の研究発表の機関を持たないために、せっかくの典籍・記録・文書等の学界への紹介・提供に不十分な恨みがあつたように思う。他大学の研究者などからいろいろと問い合わせがあるのもその事と無関係ではないと思う。また学内の研究者、ことに若い研究者に図書館の資料をつかってどんどん研究してもらいたいのである。

本昭和六三年度は館蔵の久我家文書が国の重要文化財に指定されたという図書館にとって意義ある年であつた。このことを記念して「図書館紀要」の発刊を企図した。幸い大学当局はよくその意味を了承せられ、ここに発刊することができたのは我々にとって寔に欣快に堪えないことである。

創刊号には先ず久我家文書を取りあげたが、それには卒業論文・修士論文と一貫して久我家文書を取り扱ってきた岡野友彦氏の意欲的な論文を掲載することができた。また今年度に入手した畠山家文書を小川信教授に、これも近年の受入れにかかる白河結城文書を中野達平講師に、それぞれ紹介していただいたが、学界に益するところが大きいと思う。さらに館蔵のJ.S.ミルの著書・書簡類については、予て研究されている山下重一教授に煩わせ、熊野縁起については徳江元正教授に稿を起こしていただいた。古山・林両館員にも館蔵図書を紹介をよせてもらい、これで充実したものとなつたと思う。

本紀要は一年にわずか一回の発行にすぎないけれども、今後も本学図書館所蔵の典籍・資料等の研究・発表の機関として有意義な発展を遂げていきたいと思うものである。

平成元年三月五日

國學院大學図書館長 林 陸朗